

氏名 チイエウ カイン テイエ  
 ヨミガナ チイエウ カイン テイエ  
 学位の種類 博士（美術）  
 学位記番号 博美第545号  
 学位授与年月日 平成29年3月27日  
 学位論文等題目 〈論文〉 「ベトナムの漆芸と日本の漆芸」  
 技術と表現の比較を通して展開する未来  
 〈作品〉 対話Ⅰ～Ⅳ  
 人間Ⅰ～Ⅶ  
 自然Ⅰ～Ⅶ  
 日本の漆芸技法実習手板  
 実験手板  
 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	三田村有純
（論文第1副査）	東京藝術大学	特任教授	（グローバルサポート センター）	井谷 善恵
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小椋 範彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（大学美術館）	黒川 廣子
（副査）	宇都宮大学	教授	（）	松島 さくら子
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

ベトナムはアジアの中で海に広く面している為に、様々な国の影響を受けて現在に至っている。そのベトナムから出土する漆製品には個性的な物が多く、独自の漆芸文化を持って来たと考えられる。日本においては世界最古の漆製品が出土するなど、縄文遺物には興味深い物が多く、筆者の心は動かされる。この日本とベトナムの漆芸の歴史的考察から、筆者の現在の研究の立場を述べ、今後筆者が研究したいこと、筆者が最終的に展開したい研究についての総論を述べる。

第一章ではベトナムの漆芸史に関する中国、フランスと日本の美術交流史である。ベトナム漆はおおよそ2500年前にドンソン文化というベトナム北部の紅河流域を中心に成立した。東南アジア初期の金属器文化の時代から使われていたという証拠が見つかっている。かれらは漆の木から採取した樹液で、生活の中で使用する漆器を作っていたのである。ベトナム漆芸史はこの後中国、フランスと日本の美術から影響を受け、独自の表現がなされたのである。

第一章は四つの内容で構成されている。第一節はベトナムの漆芸史上、最も古い遺物について研究をした。このような漆器がハイフォン県（首都ハノイから約100キロメートルの位置）にある墳墓で発見さ

れている。ベトヘー墳墓からは、漆塗りの木棺と漆塗りの薄い石片も出て来た。この石片の朱と黒の対比は、日本の縄文時代の漆の異物にも同様に見られ、二つを比較することで興味深い成果が期待できた。日本の各時代の地層からは夥しい漆器が出土され、また伝世している姿を見ると世界が日本を「漆器の国」とたたえているのが理解できるのである。

第二節は中国の影響でクラフトとして発展した漆芸の研究である。17世紀～19世紀には、諸外国の使節に対して漆器を贈るなど、漆工芸は外交上の重要な産物となっていた。中国との関係を探る時に重要な人物、タン・ル(1470-1540)は、ベトナムの漆産業の発明者といわれている。ベトナムの15世紀からのレー王朝(1427-1798)時代にはタン・ルが、中国の河南省へ旅し、漆の研究をしたという記録がある。彼は中国から故郷へ戻って、そのため、タン・ルが生まれたビンボン市は、漆の発祥地と考えられるようになり、彼が習得してきた中国様式の漆の技を伝え、現在に至る迄、ベトナムの漆工業がここを中心に発展してきたのである。

第三節はフランスの影響で近代絵画の素材として発展した漆絵という独特な表現を持っているベトナムの漆芸史である。

第四節はベトナムと日本の漆芸交流史の研究である。フランス植民地時期からインドシナ美術学校の漆芸学部のアリス・アイメ教授(1849-1989)は来日したことがあり、日本の漆芸文化に関する様々な研究をしました。日本の様式を受け取った彼女はインドシナ美術学校で学生たちに日本漆の技法を伝授したのである。

第二章では日本の伝統的漆芸における技術と表現の研究である。日本生活と漆文化と日本漆芸の伝統技法について二つの内容を研究している。筆者は現在漆芸研究室で日本伝統漆芸を研究している。基本的な技法だけでなく、蒔絵、螺鈿、卵殻、沈金、変わり塗りという独自の技法を中心に研究している。漆の伝統技法を学ぶだけでなく、日本の生活の中で漆文化がどのような役割を果たしているかも、調査する予定である。

第三章ではベトナムの漆芸、日本漆芸に関する技術と表現の比較研究を行うことである。本論文中でこの章が一番重要な内容となると考えている。これまで日本に住んだ三年間に、東京藝術大学で日本漆の伝統技法や表現などの知識を吸収できたので、日本の漆芸とベトナムの漆芸の技術と表現の比較する能力が身についたと信じている。ベトナムの漆の特徴について紹介し、日本の伝統的な漆芸の技術と表現を比較する研究をする。東京藝術大学大学院博士課程での研究成果を元に、深い知識と実践に基づいて、日本の漆と比較することで、我が国の漆の長所と短所を把握しながら、ベトナム漆文化に筆者が貢献出来る役割を真摯に実行したいである。また両国の技法を融合した実験をもとに自分の新しい技術を創造したいと思っている。

第四章では筆者が、東京藝術大学で様々な日本美式と漆芸伝統的な技法を学んだことをもとにして、自己の作品を作る。これまで筆者は日本の伝統的な音楽会、漆祭、茶道などのような多くの文化的社会活動にも参加をしてきた。その結果、漆はクラフト・アートだけではなく、文化でもあることがよく理解できた。漆は筆者にとって、日本文化の知覚へと近づくためのかけ橋なのである。また、芸術の創造についての自分の考えにも大きな変化をもたらしたので、博士課程のコンセプトとして発信をする。

発表する作品は「人間と自然の関係」をテーマとしている。両国の技術と素材を融合し未来に向けて両国が大きく華開くことを願っている。

(論文審査結果の要旨)

博士号授与に値する論文と判断する。

その根拠は：

- オリジナリティに富み、日本とベトナムの二国間だけでなく、ベトナムと中国やフランスとの関係にまで踏み込み、グローバルな視点で、アジアの、そしてベトナムの漆芸史を論じている。
- 日本の漆芸及び文化について、外国人（ベトナム人）の眼で見て体験したことをベトナムの文化や漆工史との比較の中で明快に論述している。
- 母国で学んだベトナムの漆絵と東京藝術大学で学んだ日本の漆芸の技法を融合させようとした自作品について、これまでの軌跡及び博士修了制作工程の中で（科学的分析も含めて）順を追って論理的に述べている。
- 決章では彼自身のこれまでの研究によって可能となったベトナムの漆を使って日本の技法を使う新しい漆芸の可能性について独創的な点から論じている。

外国人が日本語で論文を書くというハンディの中で、日本語の使い方、日本語の論文としての不完全性（特にカタカナで書かれた外来語など）が見られるものの、学術的に日本人では知ることが難しかったベトナム漆について日本語で書き、東京藝術大学とベトナムの交流史など未だ不明な点はあるもののそれらについても今後の調査や、さらなる活躍が期待できる。以上の点から博士号授与に値する論文であると判断するものである。

#### （作品審査結果の要旨）

フランス絵画の影響を強く受けたベトナムの漆芸は独特の漆絵として発展してきた。

本申請者は東京藝術大学漆芸研究領域の客員研究員、博士後期課程併せて4年間の中で日本の漆芸技術、漆芸装飾技法を研究してきた。中でも日本の変塗の表現を研究し、ベトナム材料で日本の変塗を表現する為にいろいろ研究してきたが、特にベトナム漆を使った変塗表現の可能性を見いだしてきた。

また日本の漆精製技術の研究でベトナムの生漆が真っ黒に変色する技術も習得し、ベトナムの漆精製の発展も期待ができる。

本申請者は在学中に余白の美のような日本の構成美や邦楽、祭り、茶道、日舞、芸者など日本の伝統のある様々なものと出会い、文化体験がこの提出作品に込められている。

本申請者は、ベトナムの古くからある儀式、神への祈りの舞いが日舞とシンクロしている。本申請者にとって特別な存在として芸者をモチーフとして作品をまとめている。

芸者等モチーフの選択には少し無理があるがこの研究では数々の変塗を使ったそれぞれの作品の表現は滞在中の体験、研究の証であり、日本文化とベトナム文化、そして技術の融合と結晶であろう。

日本の漆芸技術は研炭による研出で平滑面を出すのが、提出作品は曖昧な平滑面である為、今までどおりのベトナムで制作してきた作品の仕上がり感ではやや違和感が残る。また作品構成としては全体にはもう少し大きなインパクトが欲しいところである。

4年間の日本滞在中で培われた感性、構合力等を使った、ベトナムを脱出したグローバルな作品が無かったのが少々残念である。今後昇華していくには時間がかかるのであろうが、博士学位授与には十分な作品であり、ふさわしいと判断する。

#### （総合審査結果の要旨）

ベトナムは国自体が南北に長く、東海岸は太平洋に面し、長い海外線を誇り、古来より海を通じた国際交流の要地であり、東西を繋ぐ様々な文化が生まれて発展してきた。漆芸もベトナム特有の漆樹があり、漆文化もその中にある。

ベトナムのハノイにあるベトナム芸術大学の現役の専任講師として漆芸を通じた絵画表現を教える申請者は、本学の博士課程にて更に高度な漆芸技法の修得と日本古来の伝統文化の体験学習を含め、多角的に研究を進めてきた。

論文はベトナムにおける漆芸の歴史が、深く中国からの影響を受けてきたこと、その後のフランスとの

相互交流、そして日本との交流などを、各種文献を元にした調査で、芸術文化が民族を超え、時代を超えて発展していく姿を明らかにしてきたことで、先攻研究には無い独自性を秘めている。

作品は、ベトナムと日本の漆の木の特徴を踏まえ、そこから作り出されてきた技術的な解釈を総合的に融合してきた。素材の研究、下地法の研究、各種表現の研究等広い範囲で実験を繰り返し、作品として完成をさせた。

太陽が昇り、沈んでいく一日の太陽の動き、特に葉が落ちた秋の夕暮れと日本の伝統文化の象徴として芸者の姿をした和装の女性を描くことによって、歴史を背負ってきた文化が時代の中で忘れ去られようとしていることをテーマとして4枚の壁面で構成をした。

これらの総合的な観点から、漆文化の未来を導こうとする申請者には、今後の東西の漆芸交流の旗手となることを期待したい所である。作品、論文とも少し未処理な所があるが、本学の博士課程を修了し、博士學位取得には十分なものとして認めるものである。